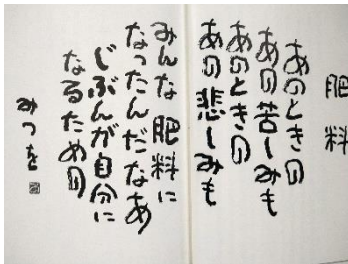




肥料



「青少年育成センターだより第158号」で相田みつをさんの「欠点まるがかえで信ずる」という言葉を紹介しました。今号も、相田みつをさんの素敵な言葉を紹介します

「あのとときの あの時 苦しきも あのとときの あの時 悲しきも
みんな肥料になったんだなあ じぶんが自分に なるための」
みつお

その書の紹介と共に、次のような言葉が書かれていました。

親に対してひどい暴力を振るう男子の中学生や高校生の相談が後を断たない。両親の不幸もさることながら、自分の親に暴力を振るわなければならない若者の無力感、孤立感に、同情や思いをはせてしまう。若者の十何年間かの過去に、年齢相応の思索をする雰囲気や、時間的精神的余裕が、どれほど与えられたか疑問だ。少年や若者が、真の成長のために必要なものは、現在の親や教師の多くが軽視しがちで「おだ」と思われる行為のなかにある。登校拒否で高校を一度中退し、社会人生活を経験した後に復学した例も少なくない。

「相田みつを いのちのことば 育てたように子は育つ」

相田みつを 書 佐々木正美 著 小学館

花や野菜を育てておられる方は知っておられることでしょうか、良い肥料を与えるとき良い花を咲かせ、おいしい実を成らせるということ。

相田さんは、人にとっての肥料は「苦しき」や「悲しき」だと言っておられます。生きていけば、誰もが「苦しき」や「悲しき」を感じる時があります。「苦しき」や「悲しき」が一度もないという人生は考えられません。どうやって「苦しき」や「悲しき」を肥料とするかについて考えてみましょう。

「疾風に勁草（けいそう）を知る」（激しい風が吹いてはじめて強い草を見分けることができる[後漢書]）という言葉があります。人間も苦難や困難にぶつかったときこそ、その人の本当の芯の強さがわかるのです。私たちは、苦しいことや悲しいことに出会ったときには、それから逃げるのではなく、その時はどんと構え、それを受け止め、通り過ぎるまで耐えることが大切なのではないのでしょうか。そのことにより、自分が鍛えられ、さらに強く、たくましくなれるのです。

人生は、順風満帆な時ばかりではありません。逆風が吹くこともあります。その逆風の中で、子どもたちがどうしていいのか立ち止まったり、苦しんでいたりしている時に親として平気であることは難しいことです。時には、悩みを聞いてやり、手助けをすることが必要なときもあるでしょうが、子どもが耐える力をつけるためにじっと見守ることも大切なのではないかと思います。

「苦しき」や「悲しき」を子どもの成長の肥料とさせるために。

文責＝青少年育成センター指導員 藤村